地誌研年報 7 号, 1998年 3 月
ANREG 7 , March1998

シンポジウム「海外地域調査と地誌学—地理学の貢献と課題—」にあたって

森 川　　洋*

本特集は, 1997年9月21日に広島大学文学部大会議室で開催された1997年度のシンポジウム「海外地域調査と地誌学—地理学の貢献と課題—」の報告と討論を収録したものである。一昨年のシンポジウム「地誌学とエリアスタディ—現状と課題—」は，地誌学そのもののあり方について地理学の内外から検討したものであったが，地理学の重要分野として地誌研究に強い関心をもつ研究者が多く，熱心に討論が行われ，大きな成果を得ることができた。本シンポジウムはその後を受けて，それと密接な関係にある海外地域調査に関する問題を検討するために，岡橋秀典氏を中心に企画したものである。幸いにして，一昨年に引き続いて福武学術文化振興財団より学会・研究集会助成金の援助をいただき，岡橋秀典氏の主旨説明と司会のもとで，これまで調査隊を組織して海外地域調査を実施して来られた寺阪昭信，高橋伸夫，石原　潤，藤原健蔵の 4 氏にご発表を願った。予定した発表者の全員が快く参加して下され，充実した研究成果を得ることができたことは幸いであった。

その場合に特に注目したのは，①他分野と比較して，地理学の海外調査のテーマはいかにあるべきか，②現地研究者との交流や共同研究はどうあるべきか，③調査・収集された資料の保存と利用についていかにあるべきか，とくにただ一度の調査だけでなく，同一地域を年次を変えて調査する場合にどのようになされてきたのか，④途上国では依然として調査国への入国に困難が伴うことがあるが，それにはいかに対応してきたのか，⑤地理学者による今後の海外地域調査に対して有益な提言はないか，などである。

これまでにも，海外地域調査については経済地理学会において1968年に「海外地域研究の成果と方法」と題するシンポジウムで一度検討されたことがあったが，それから30年を経た今日この問題を再び検討することは意義あることといえる。今日では，個人で出かけたり調査隊を組織したりして，先進国にも中進国，途上国にも，多くの地理学者が海外地域調査を行うようになった。そうした中で，調査隊を組織した海外調査がいかに行われるべきかは改めて問われるべき問題といえよう。

先日はじめてアジア経済研究所を訪問して感じたことだが，その研究報告には政治と経済が中心で，ときに民族問題，さらにわずかに地域格差が論じられるぐらいで，地域構造

*広島大学総合地誌研究資料センター長；Director, Research Center for Regional Geography, Hiroshima University

など地理的な内容のものはほとんど目にとまらなかった。他分野との共同研究においても，地理学の海外地域調査はどうあるべきか，地理学の研究成果は学界や社会にどう生かされるのか，いま一度互いに話し合うことは今後に資することが大きいと思われる。

本シンポジウムにご報告いただいた上記4名の発表者をはじめ，シンポジウムの趣旨説明を行い，手際よく司会を務められた岡橋氏，熱心な討論にご参加いただいた参加者の皆様に厚くお礼を申し上げたい。なお，本研究に格別のご理解をいただき，一昨年に引き続いて学会・研究集会助成金のご援助をいただいた財団法人福武学術文化振興財団のご厚意に対し，心から謝意を表したい。